川崎賢子（清華大学日本研究センター客員研究員）

連載 19 レクイエムとしての小津映画

日中戦争から帰還した小津安二郎は『キネマ旬報』1940 年 1 月 1 日号の座談会「小津安二郎と語る」で、帰ってから観た映画について次のように述べている。『ブルク劇場』（ヴィリ・フォルスト監督、1936 年）は三度観た、「ウエルナー・クラウスはいゝと思つた。非常に懐しい気持だつた。僕が戦争から帰つて来て、クラウスも未だ生きてゐたといつた感じだつた」「しかし、あれはウェルネル・クラウスで得をして居るね。クラウスがゐなければ恐らく出来ない。ヤニングスぢやどうも田舎まわりになる。『ブルグ劇場』にはならない」。

『カリガリ博士』『プラーグの大学生』のヴェルナー・クラウス、『最後の人』『嘆きの天使』のエミール・ヤニングス。この連載でも懐かしい名前である。「戦争中何んにも見てないから。『ブルグ劇場』に感心したといふより、映画とういふものは非常に愉しいといふ感じだつた」。

同じ頃、小津は帰還第一作『彼氏南京へ行く』の構想を複数のインタビューで語っている。それはのちに『お茶漬けの味』と改題されたが、内務省の事前検閲で全面改訂を命じられ、製作中止となった。結局帰還第一作となったのは 1941 年公開の『戸田家の兄妹』で、そこに描かれた家族像は、戦後の小津作品にも連続していく。——

平山周吉著『小津安二郎』（新潮社）

小津安二郎の墓（鎌倉円覚寺）
著者撮影

今年、小津安二郎生誕 120 周年、没後 60 年ということでしばらく続けた小津安二郎を読むシークエンスも今回でひと段落である。小津は 12 月 12 日に生まれ、12 月 12 日に亡くなった。

コロナ禍が始まる前 2019 年の 12 月に、中国の映画研究者の先生方を、北鎌倉円覚寺にある小津安二郎の墓に案内した。墓石には「無」とだけ刻まれている。12 月、祥月命日の近くだったからか墓には酒が供えられ花が手向けられていた。

今年 2023 年には、たくさんの小津安二郎関連の催しがあり、出版もあった。なかで感銘を受けたのは、平山周吉著『小津安二郎』（新潮社）である。小津安二郎の代表作でもある『東京物語』（1953 年）の主人公・平山周吉（笠智衆）からペンネームを名付けた氏は、かつて秀でた編集者であり、私自身、敬愛してやまない草森紳一氏とのご縁で面識がある。20 世紀メディア研究所の山本武利先生のもとを訪ねていらしたこともある。戦争、占領、検閲については深い関心を持たれている書き手とおみうけしている。『戦争画リターンズ —— 藤田嗣治とアッツ島の花々』（芸術新聞社、2015 年）などご著書にはかねて学ばせていただいていた。

平山周吉『小津安二郎』は、内奥にむかってとぐろを巻くようなまなざしと語りによって、小津安二郎映

画のなかの戦争を手繰り寄せる。とりわけ小津が愛し、期待をかけてもいた、そして戦場でたまたま面会する機会をも得ていた山中貞雄の霊を喚び出すかのような読みには圧倒される。平山は『東京物語』の鶏頭に山中の霊を読みとる。『晩春』（小津安二郎監督、1949年）の京都の宿の壺には、山中貞雄監督『丹下左膳余話 百萬両の壺』（1935年）の「壺」を見いだす。そして、戦後の小津映画の不動のヒロインとなった原節子の面影に、山中監督『河内山宗俊』（1936年）で鮮烈な印象を残した彼女に対する山中貞雄の隠された思慕を投影する。

こうして、平山は、戦後の小津映画を、山中貞雄をはじめとするおびただしい戦争の死者たちに対するレクイエムとして読みなおした。